貴婦人

泉鏡花

青空文庫

一

番茶を焙じるらしい、いゝ香気が、真夜中とも思ふ頃芬としたので、うと〳〵としたやうだつた沢は、はつきりと目が覚めた。

随分遙々の旅だつたけれども、時計と云ふものを持たないので、何時頃か、其は分らぬ。尤も村里を遠く離れた峠の宿で、鐘の声など聞えやうが無い。こつ〳〵と石を載せた、板葺屋根も、松高き裏の峰も、今は、渓河の流れの音も寂として、何も聞えず、時々颯と音を立てて、枕に響くのは山嵐である。

蕭殺たる此の秋の風は、宵は一際鋭かつた。藍縞の袷を着て、黒の兵子帯を締めて、羽織も無い、沢の少いが痩せた身体を、背後から絞つて、長くもない額髪を冷く払つた。……其の余波が、カラカラと乾びた木の葉を捲きながら、旅籠屋の框へ吹込んで、大な炉に、一簇の黒雲の濃く舞下つたやうに漾ふ、松を焼く煙を弗と吹くと、煙は筵の上を階子段の下へ潜んで、向うに真暗な納戸へ逃げて、而して炉べりに居る二人ばかりの人の顔が、はじめて真赤に現れると一所に、自在に掛つた大鍋の底へ、ひら〳〵と炎が搦んで、真白な湯気のむく〳〵と立つのが見えた。

其の湯気の頼母しいほど、山気は寒く薄い膚を透したのであつた。午下りに麓から攀上つた

時は、其の癖汗ばんだくらゐだに……

表二階の、狭い三畳ばかりの座敷に通されたが、案内したものの顔も、漸つと仄くばかり、目口も見えず、最う暗い。

色の黒い小女が、やがて漆の禿げたやうな装で、金盥に柄を附けたらうと思ふ、大な十能に、焚落しを、ぐわん、と装つたのと、片手に煤けた行燈に点灯したのを提げて、みし〳〵と段階子を上つて来るのが、底の知れない天井の下を、穴倉から迫上つて来るやうで、ぱつぱつと呼吸を吹く状に、十能の火が真赤な脈を打つた……冷な風が舞込むので。

座敷へ入つて、惜気なく真鍮の火鉢へ打撒けると、横に肱掛窓めいた低い障子が二枚、……其の紙の破から一文字に吹いた風に、又※としたのが鮮麗な朱鷺色を染めた、あゝ、秋が深いと、火の気勢も霜に染む。

行燈の灯は薄もみぢ。

小女は尚ほ黒い。

沢は其のまゝにじり寄つて、手を翳して俯向いた。一人旅の姿は悄然とする。

がさ〳〵、がさ〳〵と、近いが行燈の灯は届かぬ座敷の入口、板廊下の隅に、芭蕉の葉を引摺るやうな音がすると、蝙蝠が覗く風情に、人の肩がのそりと出て、

「如何様で、」

とぼやりとした声。

「え？」と沢は振向いて、些と怯えたらしく聞返す、……

「按摩でな。」

と大分横柄……中に居るものの髯のありなしは、よく其の勘で分ると見える。ものを云ふ顔が、反返るほど仰向いて、沢の目には咽喉ばかり。

「お療治は如何様で。」

「まあ、可ござんした。」

と旅なれぬ少ものは慇懃に云つた。

「はい、お休み。」

と其でも頭を下げたのを見ると、抜群なる大坊主。

で、行燈に伸掛るかと、ぬつくりと起つたが、障子を閉める、と沙汰が無い。

前途に金色の日の輝く思ひの、都をさしての旅ながら、恁る山家は初旅で、旅籠屋へあらはれる按摩の事は、古い物語で読んだばかりの沢は、つく／〃／とものの哀を感じた。

二

沢は薄汚れた、唯それ一個の荷物の、小さな提革鞄を熟と視ながら、蒼い形で、さし俯向いたのである。

爾時、さつと云ひ、さつと鳴り、さら〳〵と響いて、小窓の外を宙を通る……冷い裳の、すら〳〵と木の葉に触つて……高嶺をかけて星の空へ軽く飛ぶやうな音を聞いた。

吹頻つた秋の風が、夜は姿をあらはして、人に言葉を掛けるらしい。

宵には其の声さへ、寂しい中にも可懐しかつた。

さて、今聞くも同じ声。

けれども、深更に聞く秋の声は、夜中にひそ〳〵と門を行く跫音と殆ど斉しい。宵の人通りは、内に居るものに取つて誰かは知らず知己である。が、更けての跫音は、敵かと思ふ隔てがある。分けて恋のない――人を待つ思の絶えた――一人旅の奥山家、枕に音づるゝ風は我を襲はむとする殺気を含む。

処で……沢が此処に寝て居る座敷は――其の家も――宵に宿つた旅籠屋ではない。

あの、小女が来て、それから按摩の顕れたのは、蔵屋と言ふので……今宿つて居る……此方は、鍵屋と云ふ……此の峠に向合つた二軒旅籠の、峰を背後にして、崖の樹立の蔭に埋まつた寂しい家で。前のは背戸がずつと展けて、向うの谷で劃られるが、其の間、僅少ばかりでも畠があつた。

峠には此の二軒の他に、別な納戸も廐も無い、これは昔から然うだと云ふ。

「峠、お泊りでございせうな。」

麓へ十四五町隔つた、崖の上にある、古い、薄暗い茶店に憩つた時、裏に鬱金木綿を着けた

縞の胴服を、肩衣のやうに着た、白髪の爺の、霜げた耳に輪数珠を掛けたのが、店前に畏つて居て聞いたので。其処の敷ものには熊の皮を拡げて、目の処を二つ ゑぐり取つたまゝの、而して木の根のくり抜の大火鉢が置いてあつた。

背戸口は、早や充満た山霧で、岫の雲を吐く如く、幹の半ばを其の霧で蔽はれた、三抱四抱の栃の樹が、すく〳〵と並んで居た。

名にし負ふ栃木峠よ！　麓から一日がかり、上るに従ひ、はじめは谷に其の梢、やがては崖に枝組違へ、次第に峠に近づくほど、左右から空を包むで、一時路は真暗な夜と成つた。……梢の風は、雨の如く下闇の草の径を、清水が音を立てて蜘蛛手に走る。

前途を遙に、ちら〳〵と燃え行く炎が、煙ならず白い沫を飛ばしたのは、駕籠屋が打振る昼中の松明であつた。

漸と茶店に辿着くと、其の駕籠は軒下に建つて居たが、沢の腰を掛けた時、白い毛布に包まつた病人らしい漢を乗せたが、ゆらりと上つて、すた〳〵行く……

峠越の此の山路や、以前も旧道で、余り道中の無かつた処を、汽車が通じてからは、殆ど廃駅に成つて、猪も狼も又戻つたと言はれる。其の年、烈しい暴風雨があつて、鉄道が不通に成り、新道とても薬研に刻んで崩れたため、旅客は皆こゝを辿つたのであるが、其も当時だけで、又中絶えして、今は最う、後れた雁ばかりが雲を越す思ひで急ぐ。……

上端に客を迎顔の爺様の、トやつた風采は、建場らしくなく、墓所の茶店の趣があつた。

「旅籠はの、大昔から、蔵屋と鍵屋と二軒ばかりでござんすがの。」
「何方へ泊らうね。」
「やあ、」
と皺手を膝へ組んで、俯向いて口をむぐ〳〵さして、
「鍵屋へは一人も泊るものがござせぬ。何や知らん怪しい事がある言うての。」

三

沢は蔵屋へ泊つた。
が、焼麩と小菜の汁で膳が済むと、最う行燈を片寄せて、小女が、堅い、冷い寝床を取つて了つたので、此からの長夜を、いとゞ侘しい。
座敷は其方此方、人声して、台所には賑かなものの音、炉辺には寂びた笑も時々聞える。
寂しい一室に、ひとり革鞄と睨めくらをした沢は、頻に音訪ふ、颯……颯と云ふ秋風の漫ろ可懐さに、窓を開ける、と冷な峰が額を圧した。向う側の其の深い樹立の中に、小さく穴の蓋を外づしたやうに、あか〳〵と灯影の映すのは、聞及んだ鍵屋であらう、二軒の他は無い峠。
一郭、中が窪んで、石碓を拡げた……右左は一面の霧。さしむかひに、其でも戸の開いた前あたり、何処ともなしに其の色が薄かつた。

で、つと小窓を開くと、其処に袖摺れた秋風は、ふと向うへ遁げて、鍵屋の屋根をさら〳〵と渡る。……颯、颯と鳴る。而して、白い霧はそよとも動かないで、墨色をした峰が揺ぶれた。夜の樹立の森々としたのは、山颪に、皆……散果てた柳の枝の撓ふやうに見えて、鍵屋の軒を吹くのである。

透かすと……鍵屋の其の寂しい軒下に、赤いものが並んで見えた。見る内に、霧が薄らいで、其が雫に成るのか、赤いものは艶を帯びて、濡色に立つたのは、紅玉の如き柿の実を売るさうな。

「一つ食べよう。」

迚も寝られぬ……次手に、宿の前だけも歩行いて見よう、——

「遠くへ行かつせるな、天狗様が居ますぜえ。」

あり合はせた草履を穿いて出る時、亭主が声を掛けて笑つた。其の炉辺には、先刻の按摩の大入道が、やがて自在の中途を頭で、神妙らしく正整と坐つて。……胡坐掻いて駕籠舁も二人居た。

沢は此方の側伝ひ、鍵屋の店を謎を見る心持で差覗きながら、一度素通りに、霧の中を、翌日行く方へ歩行いて見た。

少し行くと橋があつた。

驚いたのは、其の土橋が、危つかしく壊れ壊れに成つて居た事では無い。

渡掛けた橋の下は、深さ千仞の渓河で、畳まり畳まり、犇々と蔽累なつた濃い霧を、深く貫いて、……峰裏の樹立を射る月の光が、真蒼に、一条霧に映つて、底から逆に銀鱗の竜の、一畝り畝つて閃めき上るが如く見えた其の凄さであつた。

流の音は、ぐわうと云ふ。

沢は目のあたり、深山の秘密を感じて、其処から後へ引返した。

帰りは、幹を並べた栃の木の、星を指す偉大なる円柱に似たのを廻り廻つて、山際に添つて、反対の側を鍵屋の前に戻つたのである。

「此の柿を一つ……」

「まあ、お掛けなさいましな。」

框を納涼台のやうにして、端近に、小造りで二十二三の婦が、しつとりと夜露に重さうな縞縮緬の褄を投げつゝ、軒下を這ふ霧を軽く踏んで、すらりと、くの字に腰を掛け、戸外を視めて居たのを、沢は一目見て悚然とした。月の明い美人であつた。

が、櫛巻の髪に柔かな艶を見せて、背に、ごつ〳〵した矢張り鬱金の裏のついた、古い胴服を着て、身に染む夜寒を凌いで居たが、其の美人の身に着いたれば、宝蔵千年の鎧を取つて投懸けた風情がある。

声も乱れて、

「お代は？」

「私は内のものではないの。でも可うござんす、めしあがれ。」
と爽な、清しいものいひ。

四

沢は、駕籠に乗つて蔵屋に宿つた病人らしい其と言ひ、鍵屋に此の思ひがけない都人を見て、つい聞知らずに居た、此の山には温泉などあつて、それで逗留をして居るのであらう。と先づ思つた。

処が、聞いて見ると、然うで無い。唯此処の浮世離れがして寂しいのが気に入つたので、何処にも行かないで居るのだと云ふ。

寂しいにも、第一此の家には、旅人の来て宿るものは一人も無い、と茶店で聞いた——泊がさて無いばかりか、※して見ても、がらんとした古家の中に、其の婦ばかり。一寸鼠も騒がねば、家族らしいものの影も見えぬ。

男たちは、疾から人里へ稼ぎに下りて少時帰らぬ。内には女房と小娘が残つて居るが、皆向うの賑かな蔵屋の方へ手伝ひに行く。……商売敵も何も無い。只管人懐かしさに、進んで、喜んで朝から出掛ける……一頃皆無だつた旅客が急に立籠んだ時分は固より、今夜なども木の葉の落溜つたやうに方々から吹寄せる客が十人の上もあらう。……其だと蔵屋の人数ばかりで

は手が廻りかねる。時とすると、膳、家具、蒲団などまで、此方から持運ぶのだ、と云ふのが、頃刻して美人の話で分つた。

「家も此方が立派ですね。」

「えゝ、暴風雨の時に、蔵屋は散々に壊れたんですつて……此方は裏に峰があつたお庇で、旧のまゝだつて言ひますから……」

「其だに何故客が来ないんでせう。」

「貴下、何もお聞きなさいませんか。」

「はあ。」

沢は実は其段心得て居た、為に口籠つた。

「お化が出ますとさ。」

痩ぎすな顔に、清い目を※つて、沢を見て微笑んで云つた。

「嘘でせう。」

「まあ、泊つて御覧なさいませんか。」

はじめは串戯らしかつたが、後は真個誘つた。

「是非、然うなさいまし、お化が出ると云つて……而して婦が一人で居るのを見て、お泊んなさらないでは卑怯だわ。人身御供に出会せば、屹と男が助けると極つたものなの……又、助けられる事に成つて居るんですもの。ね、然うなさい。」

で、退引きあらせず。

「蔵屋の方は構ひません。一寸、私が行つて断つて来て上げます。」

と気軽に、すつと出る、留南奇の薫が颯と散つた、霧に月射す裳の影は、絵で見るやうな友染である。

沢は笊に並んだ其の柿を鵜呑にしたやうに、ポンと成つた——実は……旅店の注意で、暴風雨で変果てた此の前の山路を、朝がけの旅は、不案内のものに危険であるから、一同のするやうに、路案内を雇へ、と云つた。……成程、途中の覚束なさは、今見た橋の霧の中に穴の深いのでもよく知れる……寝るまでに必ず雇はう、と思つて居た、其の事を言ひ出す隙も無かつたのである。

「お荷物は此だけですつてね、然う?……」

と革鞄を袖で抱いて帰つて来たのが、打傾いて優しく聞く。

「恐縮です、恐縮です。」

沢は恐入らずには居られなかつた。鳶の羽には託けても、此の人の両袖に、——恁く、なよなよと、抱取らるべき革鞄ではなかつたから。

「宿で、道案内の事を心配して居ましたよ。其は可いの、貴下、頼まないでお置きなさいまし。途中の分らない処は僅少の間ですから、私がお見立て申すわ。逗留してよく知つて居ます。」

と入替りに、軒に立つて、中に居る沢に恁う言ひながら、其の安からぬ顔を見て莞爾した。

「大丈夫よ。何が出たつて、私が無事で居るんですもの。さあ、お入んなさいまし。あゝ、寒いわね。」

と肩を細り……廂はづれに空を仰いで、山の端の月と顔を合せた。

「最う霜が下りるのよ、炉の処で焚火をしませうね。」

五

美女は炉を囲んで、少く語つて多く聞いた。而して、沢が其の故郷の話をするのを、もの珍らしく喜んだのである。

沢は、隔てなく身の上さへ話したが、しかし、十有余年崇拝する、都の文学者某君の許へ、宿望の入門が叶つて、其のために急いで上京する次第は、何故か、天機を洩らすと云ふやうにも思はれるし、又余り縁遠い、そんな事は分るまいと思つて言はなかつた。

蔵屋の門の戸が閉つて、山が月ばかり、真蒼に成つた時、此の鍵屋の母娘が帰つた。例の小女は其の娘で。

二人が帰つてから、寝床は二階の十畳の広間へ、母親が設けてくれて、其処へ寝た——丁ど真夜中過ぎである。……

枕を削る山風は、激しく板戸を挫ぐばかり、髪を蓬に、藍色の面が、斧を取つて襲ふかと

もの凄い。……心細さは鼠も鳴かぬ。

其処へ、茶を焙じる、夜が明けたやうな薫で、沢は蘇生つた気がしたのである。

けれども、寝られぬ苦しさは、ものの可恐しさにも増して堪へられない。余りの人の恋しさに、起きて、身繕ひして、行燈を提げて、便のないほど堂々広い廊下を伝つた。

持つて下りた行燈は階子段の下に差置いた。下の縁の、ずつと奥の一室から、ほのかに灯の影がさしたのである。

邪な心があつて、ために憚られたのではないが、一足づゝ、みし〳〵ぎち〳〵と響く……嵐吹添ふ縁の音は、恁る山家に、おのれ魅と成つて、歯を剥いて、人を威すが如く思はれたので、忍んで密と抜足で渡つた。

傍へ寄るまでもなく、大な其の障子の破目から、立ちながら裡の光景は、衣桁に掛けた羽衣の手に取るばかりによく見える。

ト荒果てたが、書院づくりの、床の傍に、あり〳〵と彩色の残つた絵の袋戸の入つた棚の上に、呀！　壁を突通して紺青の浪あつて月の輝く如き、表紙の揃つた、背皮に黄金の文字を刷した洋綴の書籍が、ぎしりと並んで、燦として蒼き光を放つ。

美人は其の横に、机を控へて、行燈を傍に、背を細く、簀をすらりと、なよやかに薄い絹の掻巻を肩から羽織つて、両袖を下へ忘れた、双の手を包んだ友染で、清らかな頸から頬杖支いて、繰拡げたペイジを凝と読入つたのが、態度で経文を誦するとは思へぬけれども、神々

しく、媚めかしく、然も婀娜めいて見えたのである。

「お客様ですか。」

沢が、声を掛けようとして、思はず行詰つた時、向うから先んじて振向いた。

「私です。」

「お入んなさいましな、待つて居たの。屹と寝られなくつて在らつしやるだらうと思つて、」

障子の破れに、顔が艶麗に口の綻びた時に、さすがに凄かつた。が、寂しいとも、夜半にとも、何とも言訳などするには及ばぬ。

「御勉強でございますか。」

我ながら相応はない事を云つて、火桶の此方へ坐つた時、違棚の背皮の文字が、稲妻の如く沢の瞳を射た、他には何もない、机の上なるも其の中の一冊である。

沢は思はず、跪いて両手を支いた。やがて門生たらむとする師なる君の著述を続刊する、皆名作の集なのであつた。

時に、見返つた美女の風采は、蓮葉に見えて且つ気高く、

「何うなすつたの。」

沢は仔細を語つたのである……

聞きつゝ、世にも嬉しげに見えて、

「頼母しいのねえ、貴下は……えゝ、知つて居ますとも、多日御一所に居たんですもの。」

「では、あの、奥様。」

と、片手を支きつゝ、夢を見るやうな顔して云ふ。

「まあ、嬉しい！」

と派手な声の、あとが消えて、じり〳〵と身を緊めた、と思ふと、ほろりとした。

「奥様と云つて下すつたお礼に、いゝものを御馳走しませう……めしあがれ。」

と云ふ。最う晴やかに成つて、差寄せる盆に折敷いた白紙の上に乗つたのは、たとへば親指の尖ばかり、名も知れぬ鳥の卵かと思ふもの……

「栃の実の餅よ。」

同じものを、来る途の爺が茶店でも売つて居た。が、其の形は宛然違ふ。

「貴下、気味が悪いんでせう……」

と顔を見て又微笑みつゝ、

「真個の事を言ひませうか、私は人間ではないの。」

「えゝ！」

「鸚鵡なの、」

「……」

「真白な鸚鵡の鳥なの。此の御本の先生を、最う其は……贔屓な夫人があつて、其の方が私を飼つて、口移しに餌を飼つたんです。私は接吻をする鳥でせう。而してね、先生の許へ贈りも

のになつて、私は行つたんです。

先生は私に口移しが出来ないの……然うすると、其の夫人を恋するやうに成るからつて。

私は中に立つて、其の夫人と、先生とに接吻をさせるために生れました。而して、遙々東印度から渡つて来たのに……口惜いわね。

其で居て、傍に置いては、つい口をつけないでは居られないやうな気に成るからつて、私を放したんです。

雀や燕でないのだもの、鸚鵡が町家の屋根にでも居て御覧なさい、其こそ世間騒がせだから、こゝへ来て引籠つて、先生の小説ばかり読んで居ます。

貴下、嘘だと思ふんなら、其の証拠を見せませう。」

と不思議な美しい其の餅を、卜唇に受けたと思ふと、沢の手は取られたのである。

で、ぐいと引寄せられた。

「恁うして、さ。」

と、櫛巻の其の水々とあるのを、がつくりと額の消ゆるばかり、仰いで黒目勝な涼い瞳で凝と、凝視めた。白い頬が、滑々と寄つた時、嘴が触れたのであらう、……沢は見る〳〵鼻のあたりから、あの女の乳房を開く、鍵のやうな、鸚鵡の嘴に変つて行く美女の顔を見ながら、甘さ、得も言はれぬ其の餅を含んだ、心消々と成る。山風に弗と灯が消えた。

と婦の全身、廂を漏る月影に、たら〳〵と人の姿の溶ける風情に、輝く雪のやうな翼に成る

のを見つゝ、沢は自分の胸の血潮が、同じ其の月の光に、真紅に透通るのを覚えたのである。

「それでは、……よく先生にお習ひなさいよ。」

東雲の気爽に、送つて来て別れる時、つと高く通しるべの松明を挙げて、前途を示して云つた。其の火は朝露に晃々と、霧を払つて、満山の木の葉に映つた、松明は竜田姫が、恁くて錦を染むる、燃ゆるが如き絵の具であらう。

……白い鸚鵡を、今も信ずる。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1　泉鏡花」国書刊行会
　1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行
　1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行
底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店
　1940（昭和15）年発行
初出：「三越」
　1911（明治44）年10月
※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。
入力：門田裕志
校正：川山隆
2009年5月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

貴婦人

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/